

土方洋一教授を送る

高田 祐彦

三十七年の長きにわたって本学で教鞭をとられた土方教授が退任される。感慨が深い。ご経歴や業績の詳細については、後ろのページに譲り、ここでは、もっぱら個人的な立場から、肩の力を抜いて、教授の学問やお人柄について述べてみたい。

教授は、私より五年先輩であるが、大学時代はかろうじて重なっているという程度で、お話をしたことはない。卒業論文を書く時になって、前の年に発表されていた「源氏物語の言語の構造・序説―テキスト論の視座から―」という論文を読み、驚嘆した。そこには、民俗学から民話学、構造主義など、関連する分野の最新の知見が動員され、右も左もわからない学部生は、源氏物語の研究には、こういうことも勉強しなければならぬのか、とほとんど絶望的な思いを味わった（初出稿にあたってみてください）。その後、教授は、次々と斬新な論文を発表され、源氏研究の若き旗手となり、大学院に進学したこちらにとつてまぶしい先導者であった。

何年かが経ち、日文協（日本文学協会）の研究発表大会で、私がバネリストの一人となった時、そのシンポジウムの司会を教授が務められた。初めてお目にかかるので非常に緊張したが、事前の打ち合わせで、三人のバネリスト各自の問題意識を丁寧に引き出しつつシンポジウムのビジョンを相談してくださる姿勢に、深い安心と信頼を抱いた。論文から抱いた恐い人というイメージは、暖かい穏やかなお人柄に修正されたが、シンポジウム終了後の懇親会では、ご自分より少し先輩の研究者となかなか激しくやり合っている姿を見て、あ、やっぱり、などと奇妙な安心感も持ったのであった。

その翌年、私は神戸に赴任したので、しばらくお会いする機会も途絶えたが、本学に赴任するに至って、新たに同僚というお付き合いも始まった。同僚として対等の関係を心がけてくださり、常々温かな心遣いを賜ったことは、本当にありがたかった。学科においては、非常に綿密な配慮を以て諸事万般を処理

され、筋の通らないことはきちんと軌道修正されるのが常であつた。日文の良心として、他学科の方の信頼のことばを聞いたことも一度や二度ではない。

教授の研究については、今さら喋々するまでもないだろう。

源氏物語をはじめとする物語文学から日記文学、枕草子、説話神話、和歌と縦横無尽である。近代文学や関連する諸分野にも広く通じている。深い問題意識、的確な方法、強靱な思考力と論理、そして明晰な文章、いずれも兼ね備えた希有な研究者といえよう。また、学者としての力量もさることながら、その裾野に広がる教養や趣味の世界の広さと深さも、並大抵ではないクラシック音楽、映画、落語、漫画、サブカル……。いつも楽しいお話に魅了されていた。この『語文』にも、「ゴジラの記号学」という論文がある。

しかし、このような教授にも、意外な一面はある。

ある時、数人で食事をしていて折のこと、薬の服用という話になった時、教授は、「薬なんて、飲みたいときに飲みたいだけ飲めばいいんじゃない？」と言われ、一同、度肝を抜かれ、呆れた。常日頃の冷静沈着なお人柄や緻密で精度の高い論文にうかがわれる頭脳とのギャップに、しばし場は盛り上がったが、「ふーむ、こんなところまで常人とは違うのか」と妙な感心をしたおぼえがある。

こんな逸話は、おそらく教え子の人々がもつともつと豊富にお持ちであろう。時々、学生たちからおもしろいエピソードを

聞くことがあるが、そういう時の学生はとても楽しそうで、教授への親愛の情にあふれている。教授の研究室は「ひじ研」と呼ばれ、そこに集う広い年代にわたる教え子たちに注ぐ教授の愛情はとても暖かい。教授に指導を受けた学生時代の日々は、大切な宝物であり続けているだろう。教授と教え子の人々との交流が楽しくうかがえる一冊の本もある（探索して下さい）。

この文章は、「教授を送る」というものであるが、考えてみると、この『語文』は日本文学会の機関誌なのであって、日本文学系の雑誌ではない。学会をおやめになるという話は聞いていないので、あくまで大学の職を定年で退かれる、という区切りである。とはいえ、大学の仕事に携わらなくてよくなる、ということとは、教授に豊饒な時間をもたらすことだろう。存分に読書に浸り、豊かな趣味の世界に没頭していただきたいと思う。もちろん、研究の面でも、いくつもの手がけておられる研究があるので、いつまでもわれわれを導いてくださることと信ずる。本学における長年のお仕事に対して、心よりお疲れ様でしたと申し上げるとともに、個人的には三十年以上にわたるご厚誼に深く感謝の念を捧げつつ、ご健康とご多幸を心より祈念して、筆を置く。